

THE 12TH ZUSHI BEACH FILM FESTIVAL 2023

4/28^{FRI} - 5/7^{SUN}



4.28	FRI	OPENING DAY 映画「ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド」	5.03	WED	JAZZYSPORT & LUZeSOMBRA DAY 映画「mighty jamming film works」
4.29	SAT	YOUTH CULTURE DAY 映画「スワロウテイル」	5.04	THU	AFRICA DAY 映画「グレート・グリーン・ウォール」
4.30	SUN	KIDS DAY 映画「Men in Black II」	5.05	FRI	STREET CULTURE DAY 映画「JUST CRUISE 2」
5.01	MON	JAPANESE FILM DAY 映画「零落」(予定)	5.06	SAT	OCEAN DAY 映画「大海原のソングライン」
5.02	TUE	MUSIC DAY 映画「Our Latin Thing」(予定)	5.07	SUN	DOCUMENTA FIFTEEN DAY 映画「アフター ドクメンタ」(仮)

開演時間、出演者などは都合により変更となる場合があります。飲食物のお持ち込みはご遠慮下さい。発覚の際は没収・廃棄となる場合があります。行き帰りは住宅街を通りますので静かをお願いします。スケートボードも会場に着くまで乗らないようご協力をお願いします。駐車場のご用意はありません。公共の交通機関をご利用ください。お車でご来場の方は、近隣の有料駐車場のご利用をお願い致します。

zushifilm.com

cinemacaravan

Credit

Photo : Rai Shizuno, Cover art : Michinori Maru, Edit&Text : Takuro Watanabe, Direction-Design : Saeco Baba



THE ZUSHI BEACH FILM FESTIVAL

FROM 28.APR.FRI TO 07.MAY.SUN
2023 Times



After
DOCUMENTA FIFTEEN

meets
Cinema Caravan & ZUSHIBEACH FILMFESTIVAL

Artwork by Michinori Maru

THE 12TH Zushi Beach FILM FESTIVAL 2023

逗子海岸映画祭2023

After DOCUMENTA FIFTEEN

それぞれの個性が引き立ち、生き方や考え方を共有できる場所づくりを
逗子海岸映画祭は目指しています。

2022年夏、ドイツのカッセルで開催された国際芸術展「ドクメンタ15」に、
逗子海岸映画祭をプロデュースするシネマ キャラバンが招かれました。
「NO ART, MAKE FRIENDS」をテーマに掲げたドクメンタ15の芸術監督ルアンバからは、
私たちが逗子海岸映画祭で皆さんと一緒につくってきた、
いつも通りの、人が笑い、楽しむ空間づくりを期待され、
それに応える100日間をドイツで過ごしてきました。

どうやら、世界のアートシーンも物質的な価値より、
人の縁や人が持つワクワクするエネルギーこそ、これからは必要なのではないか？
という方向に思考をシフトし始めているようです。

今年の映画祭のテーマは「AFTER DOCUMENTA FIFTEEN」。

シネマ キャラバンが参加してきたドクメンタ15が
与えてくれたコンセプトを理解し、答え合わせをし、そこで生み出した波動を、
ドクメンタ15の会期後も私たちのような体験者たちが
それぞれのやり方で伝えていくことで、
来場していただいた皆さんにも何かの気づきを与えることができ、
皆さんとより良い時間と空間をつくり上げることが
できると信じています。

志津野 雷
(シネマ キャラバン主宰/写真家)



Road to documenta fifteen#10_Cinema Caravan+Takashi Kuribayashi_2021年, 415x600_阿波紙プリントにドローイング

世界的なアートの祭典 ドクメンタ15とは？

What mean "Documenta fifteen"

ドクメンタは、ドイツ、ヘッセン州の小さな古都・カッセルで5年に一度開催される現代美術の大型グループ展。
1955年の開催以来、2022年で15回目を迎えたドクメンタは、
その規模やテーマ性などから、ヨーロッパのみならず、世界有数の芸術展として評価されています。

2022年6月～9月に開催された「ドクメンタ15」に、
日本からはインドネシア・ジョグジャカルタにも拠点を持ち、逗子海岸映画祭とも連携を続けてきた現代美術家・栗林隆と、
逗子海岸映画祭をプロデュースするシネマ キャラバンが
唯一の日本人アーティストとして招かれました。

documenta fifteen June.18-September.25 2022 Kassel

2022年6月18日～9月25日 ドイツ・カッセルにて開催 www.documenta-fifteen.de

After

DOCUMENTA FIFTEEN

meets
Cinema Caravan & ZUSHIBEACH FILMFESTIVAL

逗子海岸映画祭をドイツに運んだ ドクメンタ15

text & photo: Rai Shizuno

シネマ キャラバンがドクメンタ15に招かれた時、現代美術の展覧会になぜ自分たちが？という疑問はメンバーたちの頭にも浮かんでいました。でも、ドクメンタ15の芸術監督であるルアンルバとのコミュニケーションを重ねていくと、彼らが求めているのはどうやら「逗子海岸映画祭」をそのまま持ってきてほしいということだと理解しました。

逗子海岸映画祭がどうやって地域に根差し、どうやって自然と向き合い、どうやってジェンダーや世代を越えて、どうやってインディペンデントで経済まで生んだのかということにとっても興味を持っていて、そのまま表現してほしいというものだったので、イベントをやってほしいということではなく、逗子海岸映画祭というムーブメントそのものが求められているんだなと、理解しました。

これは僕たちが逗子海岸映画祭に対して、そもそもイベントをやっているという意識は全くなく、時間や場所や空気の共有を大切にしているので、ドクメンタサイドはとも理解してくれていました。過去に来場してくれた方はわかるかと思いますが、逗子海岸映画祭はアート活動ではありません。ルアンルバからは「アートだけはしないでほしい」という要望があって、それならば僕たちにもできると思いましたね(笑)。

僕たちとの関わりの深いアーティスト・栗林隆とのコラボレーションでの参加となった今回、ルアンルバに与えられた「NO ART, MAKE FRIENDS」というテーマを自分たちなりの手法で表現するには、「NO ART」の部分に栗林さんが、「MAKE FRIENDS」の部分にシネマ キャラバンが表現することで、これは最高のものになると思いました。

栗林さんの案で、作品をつくる素材に、曖昧な境界線を生み出す蚊帳を用いることで、内と外、アートとノアートといったことがボーダレスに表現されました。会期中、カッセルの街中の公園や美術館など、移動しながら8つの場所で蚊帳を用いた栗林さんの作品「元気炉」、パーティート、上映用スクリーンを設置し、空間をつくってきました。

訪れるお客さんの中には「アートを見に来たのだが、これはアートなのか？」とコンフューズする人もいました。アートはこうあるべきだとアートで語りたい人にとっては理解しづらい空間だったと思います。でも、僕たちとしてはそもそもアートの世界をつくりきている訳ではないので、徹底的にいつもの空間、空気感をつくった結果「NO ART, MAKE FRIENDS」を表現できたと思います。訪れた人たちからは「オアシスのようだね」という声を聞けたり、そこにはたくさんの笑顔が溢れていました。

これはまさに逗子海岸映画祭でやって来て、求めていることなのです。逗子海岸映画祭は決して映画鑑賞会ではなく、この空間を含めた空気感、波動を共有したいと第1回目の時から言い続けて来ました。

芸術監督のルアンルバには、会期終了後に「君たちがベストアクトだった」と評価されたのは嬉しかったですね。逗子海岸映画祭で表現して来たこと、その答え合わせがドイツ・カッセルでできたと思います。

志津野 雷

写真家。シネマ キャラバン主宰、「逗子海岸映画祭」発起人。自然の中に身を置くことをこよなく愛し、写真を通して本質を探り、人とコミュニケーションをはかる旅を続ける。



フリデリツィアヌム美術館や州立公園のヴァインベルク・カッセルなど、カッセル市内の8つの会場で移動式の空間がつけられた。

photo: Rai Shizuno, Calligraphy: Michinori Maru, Drawing: Takashi Kuribayashi

DOCUMENTA FIFTEEN

Cinema Caravan & ZUSHIBEACH FILMFESTIVAL





カールスヴィーゼでの展示風景。栗林隆作品の「元気炉」やパーテントなどは、蚊帳を用いて制作された。

シネマ キャラバンのように多くのアーティストによって成り立つ集団が、オープニングプログラムとしてドクメンタの会場に空間をつくり、訪れた人は鑑賞し、シネマ キャラバンやそこにいる人たちと交流して活性化され、パブリックな存在として再び訪れたい感覚を持つようになった時、その空間が大きな価値を生みました。これが私たちが最初にイメージしていたことなのです。求めていたのはアート作品だけの話ではありません。とにかく、多くの素敵な友人たちを招いてほしかったのです。集合的であることは良いことだと考えています。でもそれだけではなく、集団的な思考を持つことは、ただ一緒に働く集団を作るよりもずっと重要なのです。

これは、シネマ キャラバンの活動には深く浸透していることなのではないでしょうか。

-RUANGRUPA



RUANGRUPA

2000年ジャカルタで発足したアート・コレクティブ。現代美術を用いて、インドネシアの都市問題やその文化的課題に回答する活動を多岐にわたって展開する。主な国際展に、光州ビエンナーレ(2002、2018)、サンパウロ・ビエンナーレ2014、あいちトリエンナーレ2016など。2022年、ドクメンタ15の芸術監督に選出。アジア出身のアーティストが選ばれるのは史上初。アート・コレクティブの登用も初の試みとなる。



Takashi Kuribayashi / 栗林 隆

アーティスト。1968年、長崎県出身。武蔵野美術大学卒業後、渡独。2002年にグンスタアカデミーデュッセルドルフでマイスター・シューラーを獲得しドイツで活躍。現在は日本とインドネシアを往復しながら国際的に活動している。2022年の「ドクメンタ15」に招聘された唯一の日本人アーティスト。遼子海岸映画祭2023の会場内に栗草スチームサウナ風作品「元気炉」が設置される。

ドクメンタがあるからカッセルに住んでいくくらい、アーティストにとってドクメンタは大きな存在です。インドネシアに拠点を移した際、アート業界の多くの人から「なんでインドネシア？」と言われてきましたが、だからこそドクメンタに近づいたわけですね。

今回ルアンバから与えられたテーマ「NO ART, MAKE FRIENDS」を表現するために「蚊帳の外」というコンセプトで空間をつくりました。

シネマ キャラバンも僕も、アート界やドイツでは蚊帳の外の存在。そんな僕らが蚊帳を使った空間で、蚊帳の中に外の人を引き込んで、人と人を繋げていく空間です。ドクメンタでは人やコミュニティの繋がり的重要性を再認識できました。そこで得たものを続け、繋がること、そして、それを伝えていく「アフタードクメンタ」が何よりも大切なのだと感じています。

-栗林 隆

DOCUMENTA FIFTEEN

逗子海岸映画祭 ボトムアップクリーンプロジェクト!

Marine environment protection activities

波の音を聴き、潮の香り心地いい風を感じながら、訪れた皆さんと最高の時間をシェアする。それを可能にしてくれるのは海があるから。逗子海岸映画祭の会場を演出してくれる一番大切な要素は海です。海への愛と感謝は言葉では言い尽くせません。誰よりも海を愛する逗子海岸映画祭は、海洋プラスチックの問題にアプローチしていきます。昨年はクリーンステーションを設置し、ステイールカップの回収や、スタッフの分別指導により、ゴミの分別化を強化しました。ブース内では、海洋ゴミに対する東京大学と子どもたちによる研究発表の映像上映のほか、海洋ゴミの仕組み解説の展示や、海洋汚染を解消する生分解性の高い洗剤のデモンストレーション、PPPプロジェクトのデモンストレーションなどを行いました。クリーンステーションは今年の会場にも登場します! ぜひお立ち寄りください。



WHAT IS MICROPLASTIC? 海洋プラスチック問題とは?

海に流れ込んだプラスチックゴミが海を汚染し、生態系にも影響を及ぼしています。漁網などに絡まったりポリ袋を餌と間違えて摂取するなど、魚、鳥、海洋哺乳動物、ウミガメといった約700種もの生物が傷つけられたり死んだりしています。また、自然に分解されないプラスチックは極小の「マイクロプラスチック」となり、魚などを通してわれわれ人間の体にも取り込まれていると言われています。2050年には海洋プラスチックの量が海にいる魚の数を上回るという予測が出ています。



Illustration by Karin Okamoto

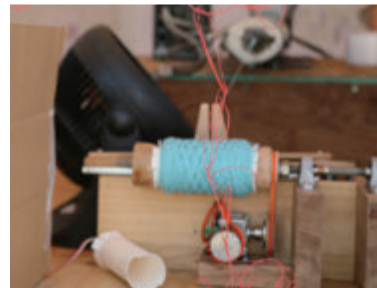
ステイールリユースカップの採用!



リサイクル可能なリユースカップを会場で試験的に使用しました。使用後は洗浄の必要なく、そのまま資源ゴミとして93%リサイクル可能。プラごみの削減とゴミのリサイクル率アップに繋がりました。

PPPプロジェクト!

プラスチックを資源として捉え直しDIYでアップサイクルするオランダ発の世界的なムーブメントが「プレシヤス・プラスチックプロジェクト(PPP)」。



OMNI マイクロプラスチック



海を漂うマイクロプラスチックの問題を、研究者と市民が一緒になって考え、知り、アクションを起こす市民参加型科学プロジェクト「OMNI マイクロプラスチック」を逗子海岸で実施しました。プロジェクトの中心チームDesignLead Xと子どもたちによる研究発表の映像を上映展示した他、海洋ゴミの仕組みを絵本のような展示で分かりやすく解説しました。



大切なのは、やっぱりLOVE? ロンハーマンのサステナビリティ RON HERMAN SUSTAINABILITY VISION

逗子海岸映画祭を長くサポートしてくれているロンハーマンは、サステナビリティを牽引するブランドなのです。そのプロジェクトは多岐に渡りますが、余剰在庫をなくすためのセール廃止や、2030年までにCO2の排出量を実質ゼロにするための自然エネルギー事業まで! その取り組みは大胆でも、言葉だけではなくリアルな行動で未来を見据えていて、ファッション業界ならずとも学ぶべきヒントがたくさんありそうです。サステナビリティプロジェクトに携わり、ロンハーマンPRの阿部真澄美さんに話を聞きました。



—ロンハーマンのサステナビリティプロジェクトはどんなことが動いているのですか?

様々なプロジェクトがあるのですが、まず、サステナビリティな取り組みをする上で、「LOVE FOR TOMORROW」というスローガンを掲げました。それ以前から大切にしてきた私たちのスローガン「Today is beautiful」、「Happiness is the goal」の延長線上にあると考えています。サステナブルな世界にならないと、「今日はいい日だね」とか、「幸せがゴール」ということが言えないのでは、と思いました。では、サステナビリティを推進するにあたる上で、どんなスローガンが適しているのか? 何が必要なのか? と考えた時に、迎っていた答えが「LOVE」だったんです。その上で、私たちのアクションは大きく4つに分けられます。「環境を守ること」「コミュニティとの関わりを深めること」「お客さまに幸せを届けること」「チームメンバーの幸福度を高めること」この4つをフォーカスポイントとしています。



—その中に自然エネルギー事業があるのですけど、でも、なぜロンハーマンが?

まず「ファッションを通して幸せを届けたい」という想いが一番にあります。そのためには、よい環境、よい世界である必要があると考えています。売上はもちろん必要ですが最優先ではありません。2030年までにロンハーマン事業においてカーボンニュートラルを目指すという目標を掲げ、エシカル協会が主宰するセミナーに参加するなど、自然エネルギーについて学びを進めている中で「市民エネルギーちば」の東光弘先生にお会いすることができました。東先生のサポートもあり、千葉県匝瑳市に2021年秋にはソーラーパネルの1号機が設置され『ロンハーマン匠達店』が誕生しました。洋服を販売するわけではなく発電施設なのですが、ストアとして位置づけています。ソーラーパネルは現在3号機まで設置されていて、生み出された電力は「みんな電力」を通じて『ロンハーマン福岡店』に供給されているほか、地元へ還元されています。

—使用しているソーラーパネルは光を遮らないんですね。

ソーラーシェアリングといいます。ソーラーパネルはお借りした耕作放棄地の農地に設置され、細長いソーラーパネルにより、作物とパネルで太陽光をシェアします。パネルの下で有機農業を行うことにより土壌を回復させ、さらに不耕起栽培に切り替えていくことで大気中からのCO2を吸収するというカーボンニュートラルへの貢献も期待しています。耕してしまうと、地中の二酸化炭素が放出されるので、あえて耕さないことで、地中のCO2を眠らせておくことができるのです。

—アパレルとしてセールの廃止がもたらすこと

—もうひとつ、ロンハーマンの大きな取り組みにセールの廃止があると思いますが、きっかけはどんなところにあったんですか?

一般的にアパレル業界にはセールありきでの作りをしている側面もあり、それが大量な余剰在庫を生み出しています。大量生産・大量廃棄の問題ですね。世界には誰の手にも渡らないまま廃棄される服が大量にあるんです。そもそも大量に作るからそうなるんですね。そこで、せめて私たちは、これまでも過剰な在庫は持っていないかったのですが、さらに生産量を見直してセールが無くて売り切れる適正在庫で勝負しようということになりました。そこで2021年に発表したサステナビリティビジョンに、店舗でのセール廃止を加えました。

—誰に届いているか以前に、誰にも届かない洋服が多いということですね。

洋服にもトレーサビリティが重要であるはずなんです。ファッション業界は誰が作っているかがわからなくてもあまり気に留められず、その部分を不透明にして、低賃金労働や児童労働などの問題も引き起こしてきました。誰かが丹精込めた洋服を適正価格で購入し、少しでも長く大切に穿着てもらえたら、作り手も買い手もハッピーなのではないかと思います。2023年中にアウトレットを除く店舗すべてのセール廃止を目標にしています。

—お客さまの反応はいかがですか?

もちろん、最初は戸惑いの声もいただきましたが、お客さまには大きな理解を得られていると感じています。

—自然エネルギーの取り組みもセール廃止の動きも、とても大胆でスピード感のある進め方ですね。

本物になりたいから、言ったからにはやり抜きたいという姿勢です。でも、楽しんで取り組むことを大切にしています。サステナビリティに向き合う上で、勉強すればするほどシリアスにならざるを得なかったし、アパレル業界が世界2位の環境汚染業界であるという現実を考えると、悲観的になることもありました。でも、これがたった一つのブランドのアクションだとしても行動するしかない。それなら、楽しくやろうと思いました。サステナビリティは地球全体のことで、業界にこだわる必要はないはずなんです。異業種の方達と繋がっていくことで、また違うスペシャルな幸せが生まれていくと思っています。私たちが動くことで、これまで自然エネルギーに興味なかった人が興味を持ってくれたり、少しでも何かが変わるきっかけになれば最高ですね。

—その根幹にあるのが「LOVE FOR TOMORROW」なんですね!

表面的なものではなく、本質的なサステナビリティに繋がっていきたいから、そのためには大きなLOVEが必要なのだと思います。



INTERVIEW WITH SHONAN RYOYU

「人との出会いや、美味しい、楽しい
という感情もエネルギーなんです」

大庭 大(湘南菱油株式会社代表取締役)



湘南・横浜エリアにガソリンスタンドを展開する湘南菱油は石油製品を販売するだけじゃないんです。野菜販売やエコショップなど「なぜガソリンスタンドに？」という光景を見かけたことはありませんか？それが湘南菱油のエネルギー事業。

代表取締役社長の大庭大さん、湘南菱油の考える“エネルギー”ってなんですか？

「私たちはこの70年、地域の方達にエネルギーを供給してここまで来ました。この先の未来をどう描こうかと考えた時に、大きなターニングポイントとなるのがガソリン車の新車販売が禁止となる2035年です。私たちにとってはアゲインストな問題ではありますが、次のエネルギーに対してどんなアクションを起こせるかを考えるための準備期間にできると思っています。石油製品を扱っている会社ではありますが、車を走らせ工場を稼働させるだけでなく、人との出会いや、美味しい、楽しいという感情もエネルギーなのだと考えています。昨年、自宅でニホンミツバチの養蜂を始めたのですが、ミツバチが存在しないと植物は繁栄できません。彼らが自分達のためにやっていることが結果として植物のためになっているんですね。ミツバチに倣うという訳ではありませんが、私たちが地域の人たちとエネルギーの媒介をしつつ、違う形のエネルギーも供給していきたいのです。新しいエネルギーの時代になるのなら保守的にならず、共に歩むしかない。そうマインドチェンジしたのは東日本大震災です。あの時、あらゆる方面から油を供給してほしいとの連絡がありました。その時に、エネルギーは常に日々の暮らしの裏側において、地域笑顔と子どもたちの未来を守るためには必要な存在なのだと気づきました。そのためには、新しい取り組みに積極的にアクションしていかないといけないと思ったのです。持続可能な世の中をつくるには、環境の側面だけでなく、地域の人たちとの繋がりが信頼関係が不可欠です。逗子海岸映画祭とも連携して、良いアクションを起こしたいです」

! Good connection!
SHONAN RYOYU × Community
湘南菱油と地域のいい関係



横須賀で一番エコなマルシェ
Gaal! 「エコルシェ5302」

横須賀・日の出町のENEOS待合室内で展開するエコショップ「エコルシェ5302」は、横須賀への愛と地域を元気にするエネルギーが詰まったショップ。セルフ給油になり利用者が減った待合室を有効活用している。



Eat good. Eat locally
Gaal! 「SAJIMA VILLAGE」

地域との共生、循環をコンセプトに、地域の恵みにこだわり、養蜂、醸造、収穫した自然の恵みを、相模湾ごしの富士山を望むスカイデッキで余すところなく味わうプロジェクトが現在進行中。



地域の生活
Gaal! プラットフォーム
Gaal! ガソリンスタンドで
Gaal! 地域食材に出会う

「R cafe」 「お野菜定期便」

鎌倉・由比ヶ浜にあるENEOSのサービスステーションの待合室をカフェスペース「R cafe」としてリニューアル。鎌倉で活動する学生団体や女性団体等とのプロジェクトで、ガソリンスタンドを地域の方々の生活プラットフォームに。葉山SSや田浦SS(ENEOS)をはじめとした三浦半島エリアのサービスステーションでは、定期的に地域農家が育てた有機減農薬野菜を販売。「地域食材×エネルギー子育て」をテーマに、売上金は子ども支援の団体に寄付している。



じもとの洗剤
逗子で作られる、海に還る洗剤

Locally made detergent that returns to the seas

逗子で作られ、海に還る洗剤があるのを知っていますか？

逗子海岸映画祭の実行委員長・長島源も関わる「じもとの洗剤」。その生みの親であり、洗剤に革命をもたらした「がんこ本舗」代表の木村“きむちん”正宏さんに、「じもとの洗剤」誕生のストーリーや想いについてお聞きしました。油も水も人間も植物も、すべては繋がって循環しているようです。

「洗剤を作っているけれど、
地球環境を守るためのきっかけなんです」

「環境保護活動のきっかけを作るのが仕事で、『じもとの洗剤』もきっかけなんです。なぜ洗うのか？と考えると、それは食器や服を再利用するために“油を取る”必要があるという考えに至りました。油を取ることを考える上で様々な研究機関を訪ねました。すると、『洗剤は油を溶かして皿の上や洋服から流して水に移動させるけど、溶けて広がるだけで再び集まってくっついてくる』と言うじゃないですか。そんな意味がないことを全世界の人間が永遠とやっているのか、これはおかしいと思ったんです」

「僕がやりたいのはこの循環の環を
きれいな環にすることなんです」

「油は植物が作ってくれたもので、植物を食べることで草食動物は油を得て、肉食動物は草食動物を食べなければ油が摂れません。すべては循環ですね。次に分解ですが、プランクトンが消費してくれることで油は分解されます。小さなプランクトンが油を分解するためには粒子を細かくする必要があります。この、油を細かくする技術に発想を得たんです。油を細かくするものに精油がありました。精油は植物油でいい香りがしますよね。いい香りがするのは、粒子が軽くて揮発するからなんです。プランクトンが油を吸収すると、油は炭素を含んでいるから水と二酸化炭素に変わり、何も無い状態をつくってくれます。すると植物プランクトンや緑をつくれる草木が、また油を蓄えてくれる。こうして循環が成立します。油の履歴は、人間が介在しなければきれいな環(わ)っかになる。僕がやりたいのはこの循環の環(わ)を途切れないように、きれいな環(わ)にすることなんです。洗剤づくりに取り組んで2019年にゼロすぎ®を実現できた。それは素晴らしいのですが、気がつく50万世帯、全国の約1%がうちの洗剤を使っていたんです。うちで大手になってシェアを増やさないといけない？CO2を排出して速く送るなんて、こんなにバカバカしいことはないなと思ったんです。次の手を考えなきゃと思い、地域の人に地域のために作ってもらう洗剤に取り組みました。大切なのは洗剤を作ることではなく、地域に愛情を持って地域の人の手で守ること。外部から余計なエネルギーを使って持ち込まれたものではなく、自分の暮らすエリアのもので暮らせることを『じもとの洗剤』が伝えられたらと思っています」

Profile

木村“きむちん”正宏
「がんこ本舗」代表。東京農業大学卒。1976年から自然保護活動続ける。1999年に世界初のすすぎ1回型の洗濯洗剤を生み、2019年に世界初となるすすぎゼロ回の洗濯洗剤を発表。



じもとの洗剤

『がんこ本舗』の洗剤「海へ...」をベースにして、地域で採れた夏みかんの皮と剪定した松葉を廃棄せずに集めて蒸留した精油を用いて作られた(合)逗子と葉山と鎌倉との地域洗剤®。「AMIGO MARKET」を始め10数店舗が量り売りを行っていて、その環が拡がりつつある。逗子海岸映画祭の開催期間中は会場内にクリーンステーションの中に「じもとの洗剤」コーナーが設置されている。

<https://jimotonosenzai.com>

Hydro Flask®
Let's Go!™

hydroflask.co.jp

[Hydro Flask® 日本総代理店] アルコインターナショナル株式会社

Pilgrim
SURF+SUPPLY

APRIL 21, 2023 OPEN
AT BEAMS TSUJIDO

タブロイドと引き換えに、(Pilgrim Surf+Supply)のステッカーをプレゼント。 ※ 引き換えは5月31日(水)まで有効です。無くなり次第、終了となります。



copyright ©Michael Aboya , Kelechi Amadi-Obi , Paulo Azevedo , Uche Okpa-Iroha , Chidinma Nnorom

Pick up Event 2023.5.4 11:00-22:00 (予定)

AFRICA Day

5/4(祝・みどりの日)はAFIRICA DAY!
映画監督であり、1999年にパリで創刊され、アフリカルチャーを中心に世界中のアート、ファッション、カルチャーを取り上げている「CLAM magazine」の発行人でもあるナイジェリア人のアンディ・アマディオ・オコロアフォー (Andy Amadi Okoroafor) を招いて、現在進行形のアフリカを体感する1日をお届けします。
フォトギャラリーでは「CLAM magazine」を彩ってきたフォトグラファーの作品を展示。そして、DJによるアフロビート・ミュージック、ガーナ&モロッコの料理やアフリカン・アイテムのショッピングが楽しめるだけでなく、アフリカン・ダンスやWAX PRINTとよばれるアフリカン・ファブリックを使ったワークショップも開催されます。五感を使ってアフリカを体感してください! 上映映画は「グレート・グリーン・ウォール」! マリ出身のミュージシャン、インナ・モジャが音楽で人々を繋ぎ、気候変動の最前線へと旅する音楽ドキュメンタリー・ムービーです。お楽しみに!



copyright © Andrew Dosumu



About ANDY AMADI OKOROAFOR



アンディ・アマディオ・オコロアフォー
ナイジェリア出身、パリ在住のクリエイティブ・ディレクター/映画監督。TEDのゲストスピーカーとしても招待されたこともある。クリエイティブスタジオCLAMを設立し、世界中のクリエイターのネットワークを駆使し、ファッションから映画まで様々な分野でのイメージの制作にあたっている。また、世界中のクリエイティブな読者に愛されている雑誌「CLAM magazine」の発行人でもある。映画作品にナイジェリアで制作し、現代アフリカを描いた初の長編映画「Relentless」(2010年)他がある。

About CLAM MAGAZINE



1999年にパリで創刊され、世界中のファッション、アート、カルチャーシーンにインスピレーションを与えてきた「CLAM magazine」。「local everywhere」をコンセプトに掲げ、毎回異なるテーマに基づいてファッション、建築、音楽、デザイン、芸術、旅が取り上げられ、世界中のさまざまなバックグラウンドを持つアーティストやクリエイターによって表現される。映画祭会場のフォトギャラリーにバックナンバーが並びます!



CLAM



News from Africa 生産者の顔が見えるコットンを着るとのこと



farmers 360° linkが繋がる綿花生産農家100人が暮らすのは、アフリカ大陸南部に位置するザンビア共和国中央州。この土地で生産されたコットン製品を着ることで、彼らの日々の暮らしにもリンクし、支援することもできる。



消費者と生産者を繋ぐ *farmers 360° link*

ファッションから見た世界の“可視化”って？

トレーサビリティという言葉聞く機会が増えたと思います。トレーサビリティ(Traceability)とは「Trace(追跡)」と「Ability(可能)」から成る言葉で、製品が「いつ、どこで、どのように、誰によって、何で」作られたのを見えるようにし、原材料の調達から生産、そして消費、廃棄まで追跡できる状態にすること。暮らしの中では、食のトレーサビリティに関しては一般的になってきましたね。どこで、どんな人が作ってくれた物なのかを知ることで、ありがたさも安心も美味しさも増すというもの。そんなトレーサビリティはファッションの世界にもあるのです。三井物産株式会社が手掛けるファッションを通じて生産者と消費者を結ぶプラットフォームがfarmers 360° link。ETC Group Limitedと協業し、ザンビアのコットン農家と繋がり、種子の段階から収穫、加工までの過程を管理するだけでなく、ブロックチェーンを活用し、製品の環境・社会へのインパクトを可視化しているのです。



farmers 360° linkのアプリを使うことで購入者は生産者の顔や農村の暮らしの様子や暮らしを知ることができるだけでなく、支払った製品価格の一部で、繋がった生産者に対して自身が選択したかたちで応援することができます。この取り組みに参画したのがロンハーマン。farmers 360° link初始動となる今回のコレクションには、農家の人権や環境に配慮して手作業で育てられたコットンをオリジナルレーベルの一つ「8100」の23SSウィメンズコレクションの素材として起用。購入者は商品についているタグのQRコードを読み込むことで、アプリを通じて生産者に対しての応援方法を選択することができるのです。応援方法は「綿花の生産量を上げるための肥料を支援」「未来を担う子どもたちのための食事を支援」「インフラを支えるためのソーラーパネルを支援」の3つ。また、応援するだけでなく、農村の人々の暮らしや生産背景、農家の人々の想いなどをアプリを通して知ることができ、プログラムの進捗状況やコミュニティの変化も見届けることができるそうです。お気に入りの服を通して世界を知る、地球環境に対する理解を深められるって心地良いことですね。

photo by Rai Shizuno ,copyright ©Rai Shizuno

farmers 360° link <https://farmers360link.com>